

筑摩世界文學大系

36

メルヴィル

阿部 知二 訳

白 鯨
書記バートルビ

筑摩書房

筑摩世界文學大系 36

昭和四十七年十月十五日

初版第一刷発行

メルヴィル

訳者

阿部 知二

発行者

井上 達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号 一〇一—一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20636 (出版社) 4604

目次

白鯨

阿部知二訳 5

書記^レハートルビ

阿部知二訳 355

『白鯨』論

宮^R・本^チ陽^エ吉^イ訳^ス 379

解説

阿部知二 391

年譜

400

メ
ル
ヴ
ィ
ル

白 鯨

ナサニエル・ホオソーンに

その天才へのわが讃仰のしるしとして
この書は献げられる。

語源部

(胸疾にてみまかりし某中学助教の提供
による)

蒼ざめた助教君、——衣服もこころも体も、
また頭脳も、ぼろぼろだった彼を、私は今も眼
に見る。いつも古びた辞典や文法書の塵をはら
っていたが、それに使う奇妙なハンカチといえ
ば、皮肉にも、ありと知られる全世界の国々の
はなやかな旗で飾られていた。彼はひたすら古
文法書の塵払いを愛したのだが、それが、そこ
はかとなく彼の定命のことを思わせたのである
らしい。

語 源

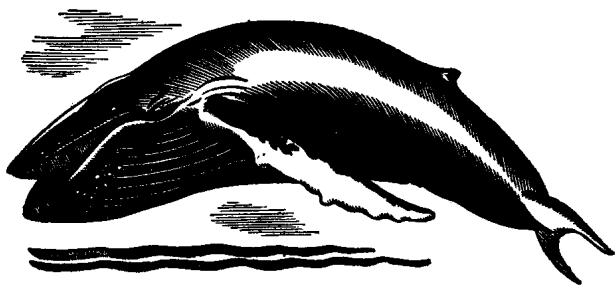
「諸子が他人を教育する仕事を始めて、わが国
語にて鯨の魚を何と呼ぶかと教えんとし、うか
つにも、この語の意義の根本要訣たるHの字を
抜こうとすれば、諸子は虚偽をつたえるものに
ほかならぬ」
ヘクルート

「WHALEは……スエーデンおよびデンマーク
語にて、hval。この獣は、デンマーク語にて
hvalt が拱門または穹窿状を指すに見ること
く、その円状または円転の状より名を得る」
「ウエフスタ辞典」

「WHALEは……より直接的には、オランダお
よびドイツの Wallen よりくる。アングロ・サ
クソン、Walwian、円転す、ころがる」
「リチャードソン辞典」

ワ	ヘ プ ル 語
whale	ギリシア 語
CETUS	ラ テ ン 語
WHOEL	アングロ・サクソン 語
HVALT	デンマーク 語
WAL	オランダ 語
HWAL	スエーデン 語
WHALE	アイスランド 語
WHALE	イギリス 語
BALEINE	フランス 語

BALENA
PEKEE-NOEE-NUEE
PEHEE-NOEE-NUEE
スペイン 語
フィジー 語
エロマンガアン 語



文獻部

(某司書助手心得の提供による)

げに哀れなこの助手心得先生の、モグラやオケラ同然の芸無しの労作は、思うにこの地上の宮廷書庫から露店までのかずかずを引っかきまわしつづけ、聖俗貴賤を問わず、本という本から、鯨にちなむ章句をやたら無性に拾集したものであるらしい。したがって読者は、少なくともいかなる場合にも、この引例中いかに權威的に見えるものがあるうとも、このごたごたの鯨文獻を、正統鯨字などと信憑してはならない。それはとんでもないことだ。ただ、ここにあるすべての古代作家または詩人についていうならば、この拔萃は、現代をふくめての諸国諸時代に、巨鯨について語られ考えられ幻想され唄われたがやがや騒ぎについての、まことにかすかな鳥瞰図のようなものをちらと見せているというほどのことで、値打と興味とがあらうか。

さらば哀れなる助手心得先生よ、私はこれから君を祖述しよう。君のような種類の、見込みも血の気もない人々は、この世のいかなる美酒も暖めてあげることもできず、この「蒼白いシエリ酒」すらもあまりに紅く強烈にすぎるだろう。だが、時として君たちと席をあたため、大いに哀憐の情を感じ、涙を酒としてかたらい、やがて眼はあふれ杯は空っぽで、「あきらめる

んだな、助手心得君よ！」などと、まんざら不愉快ばかりでもない悲しみにひたりつつ、突っ放したりすること、われわれは好むのだ。じっさい、君たちが、あらんかぎりの力で世間を喜ばそうと労苦すればするほど、君たちは、感謝も受けずさまようばかりであらう！ 私は君たちのために、ハムプトンやテューエリイの宮殿を空けてあげたいほどのだ！だが涙をこくりと呑みこんで、元氣を出して、主樁高くかけのぼりたまえ。君たちより一足先に行った連中が、七層の天界を掃除しながら、長いあいだそこで飽食していたガブリエル、ミカエル、ラファエル等の諸天使を追い立てて、君たちのくるのを待っているよ。この地上では、君たちはこなごなになった心臓を打つつけるだけだが、——あそこでは、砕けることなき玉杯を打ち鳴らすわけなのだから。さて、

文獻

「神、巨なる鯨を創りたまう」

「創世記」

「巨なる鯨、おのが後に光る道をのこせば、淵は白髪をいただけるかと疑わしむ」

「ヨブ記」

「さて神、大いなる魚を備えおきてヨナを吞ましめたまえり」

「ヨナ書」

「船そのうえを走り、汝のつくりたまえる巨

なる鯨そのうちに遊びたわむる」 「詩篇」

「その日エホバは硬く大いなる強き剣もて、疾く走る蛇のごとき巨鯨、いな、曲りうねる蛇のごとき巨鯨を罰し、また海にある竜をも殺したもうべし」

「イザヤ書」

「また、その他の何ものにもあれ、混沌なすこの怪物の口に入るものは、獣にもあれ舟にもあれ岩にもあれ、その汚れたる巨大なる咽喉の中にほしいままにむさぼられ、やがて底知れぬ腹中の淵に亡び去る」

「ホランドによる『ブルターク教訓書』」

「インド洋は世界最巨大の魚を産す。そのうち、バライネと呼ばれる鯨または渦巻魚は、ほぼ四エイカアまたはアルペンの地の長さをもつという」

「ホランドによる『プリニ』」

「われらが海上を走ることほぼ二日目、日の昇る頃おい、鯨その他の深海の怪物の大群の現わるを見ぬ。鯨のうち一つは、まこと驚くにたえし巨体なりき。……船に近づき、口を開き、四方に浪を立て、その前の海浪打ちて泡立たしめぬ」

「トックによる、ルーシアンの『種正史』」

「彼のこの国に訪れこしは、馬鯨なるものを捕うる望みにありしが、その歯牙はきわめて

貴重なる骨質なりとかやにて、彼はその幾許かを王に捧げぬ。……最上の鯨は彼の故国にて獲られ、そのうちあるものは四十八、あるものは五十ヤードの長さなりと。彼は、二日に六十を殺せし六人の者の一人なりと誇りき」

西紀八九〇年、アルフレッド王によって写し取られたところの、オサまたオクサと称するものの口述

「とにかく他の何ものにもあれ、つまり獣にも丹にもあれ、この怪物（すなわち鯨）の恐ろしい顎に飛びこむものは、たちまち呑みこまれて亡ぶのであるが、魚どもはそこを無上の避難所として眠るという」

モンテニエ「レイモン・スポンのために」

「逃げる、逃げる！ 悪魔もご照覧、こいつあ、ありがたい予言者モオゼ様が、あの律義なヨブの話のところでいわれた、あの巨鯢（きょい）つてものにまちがいっこなした」

ラブレイ

「この鯨の肝臓は荷車二台あった」

ストウ「年代記」

「巨鯢は海を泡立て、さながら煮え返る鍋のごとくなりし」

メイコンによる「詩篇」の訳出

「かの鯨また海怪の巨体の大いさについては、何ら確かなことはわからぬ。驚くべく脂を生み、かくて一つの鯨からも想像に絶する量の

油が採られる」

同上「生死の歴史」

「体内の痰には、抹香が地上最高のものである」

「ハンリ王」

「まさに鯨のごとしだ」

「ハムレット」

「そを癒すには、いかなる薬師の術も甲斐なかりし。ただ一つ道ありとすれば、邪惡の槍もて彼の胸をつらぬき傷つけ

たえまなき苦痛をあたえし敵のもとに海原を疾駆して岸に向かう鯨のごと、逆襲するのみ」

「仙女王」

「かの巨鯢のごとく、その運行は風の海をも沸き立ちかえらせる方があった」

サー・ウィリアム・ダヴィナン
ト「ゴンディバートの序文」

「抹香とは何ものか、と人の疑うも当然である。かの博学のホスマヌスも、その三十年の労作中に、はつきりと、それが何物たるかを知らずとなさん、といっておる」

サー・T・ブラウン「抹香および抹香鯨について」その「迷信論」を見よ

「新巧の連枷をもてるスペンサのタルスのごとく

その強き尾もて物みなをくだけ

その脇腹には、連枷の槍どもを設らえその背には、群立てる鉤をそなえ」

ウォラの「夏島の戦い」

「人工によって、共和国または国家と称するところの（ラテン、邦家）巨大の鯢が、人為をもつて創設されるが、——それもまた人工の人物というはかはない」

ホプス「リヴァイアサン」の冒頭

「愚かな人心君は、まるで鯢の口中の小鯛といわんばかりに、嚙みもせずそれを呑みこんだ」

「天路歷程」

「……かの海の獣巨鯢。——神の造りしもののうち最大のものにして、渺々の潮を泳ぐ」

「失樂園」

「……巨鯢こそあれ

被造物中の最大のものの、深海にして岬角のごと長々と、眠りかつ泳ぎさながら揺げる大地なり。その鯢にて大海を吸い、その息にて、大海を吐く」

同上

「漫々たる大洋にただよい、その中に漫々の油の海をたたうるもの巨鯢」

フラ「俗邦と聖邦」

「いづくかの岬の後に近く
巨鯨よこたわりて餌を待ち伏せ
追いもせず、餌食らを嚙下するほどに
かれら途をあやまりて恐ろしき顎に入る」

ドライデン 『驚異の年』

「船尾に鯨が浮かぶとき、その頭部を切つて、
舐めととものできるだけ岸近く曳く。しかし、
それは十二フィートまたは十三フィートの深
さで、底につかえる」

パークス 『トマス・エジのヌ
ビツベルゲンへの十航海』

「航海中、彼らは多くの鯨が海波にたわむれ、
造化によってその肩に取り付けられたる管と
気孔とから、もうもうと水を噴きあげてふざ
けるものを目撃した」

ハリス・コル 『サー・T・ハー
バートのアジア・アフリカ紀行』

「時に、彼らは鯨の大群を見たのであるが、
その鯨の肩に船を乗り上げまいと、細心の注
意をもって進まざるを得なかつた」

シウテンの『第六回世界周航』

「われらはエルベ河口より出帆。北東風。船
名は『鯨胎内のヨナ』……」

鯨は口を開かぬというものがあつたが、そ

れは訛伝であつた……

水夫らは、鯨が見えるかと帆柱によじ登つ
たが、最初の発見者の労に対しては、一ダカ
ットが与えられたのだ……

余は、シェトランドに曳かれた鯨の話をき
いたが、その腹中には一バレル以上の鯨がい
たという……

船の一鉤手が余に告げたのに、彼は一度ス
ビツベルゲンで、全身純白の鯨を獲つた、と」

「二六七年グリーンランド航海」ハリス・コル

「鯨群がこの岸（ファイフ）にきたことが数
度ある。主の年一六五二、その鯨骨八十フイ
ートのものがきたが、（話によれば）きわめ
て大量の鯨油のほか五百貫の鯨鬚が得られた
とのこと。その顎骨はピットフェレンの庭園
の門に立っている」

シボルド 『ファイフとキンross誌』

「抹香鯨というやつは、兇暴にして俊速、人
間業で殺せた話も聞かぬ、と耳にしたからに、
僕はそやつを征服し殺し得るかどうか試して
みよう」と約束した」

リチャード・ストラフオドの『バーミユダより
の書簡』——一六六八年、『哲学叢記より』

「大海の、鯨でさえも
神様のお言葉を聞く」

ニー・イングランド 『初等読本』

「われらは大鯨をいやというほど見た。思う
に、この南海では、北の海から比べると、い
わば百倍ほど、たくさんいるのだったから」

一七二九年、カウリ船長の『地球周航記』

「……さて、鯨の吐息たるや、頭がくるめく
ほどに耐えがたい悪臭をとまなうことしばし
ばである」

ウロフ 『南米誌』

「世にもきこえし五十の精女たちよ
肝心の、下袴をば忘れたもうなよ
裾圍めぐらし鯨骨にて鍛える
七重の垣根も防ぎがたしと聞けば」

『巻毛凌辱』

「もし地上の動物を、その大いさにおいて、
深海に棲むものと比べるならば、まるで恥か
しくて問題にはならない。明らかに鯨は、造
化物中の最大の生物である」

ゴールドスミス 『生物誌』

「雑魚どものために寓話をお書きになるなら、
そいつらを鯨のように語らせるのですね」

ゴールドスミスよりジョンスンへ

「午後、巖と見ゆるものを認めた。しかし、
それは鯨の屍体であつて、アジア人らが殺し、
岸に曳くところだったのだ。彼らは、鯨のか

げに隠れようと試みているかに見えたが、われらに見られるのを恐れたのであろう」

クック『航海記』

「より巨大な鯨を、彼らはまれにしか攻撃せぬ。水夫中のあるものは、彼らを恐怖するとただならぬものがあり、海上に出れば、その名を口にするさえはばかり、その舟に、糞尿、石灰石、杜松油その他類似物をのせて、彼らを厭がらせて、近づけぬ工夫をする」

パンクおよびソランダの二七二年の水島航海に關しての、エノ・ヴォン・トロイルの書簡

「ナンタケット島民が発見した抹香鯨なるものは、活潑兇猛の獣であり、漁夫たちは絶大の手練と勇氣とを要します」

フランス公使に与えた鯨についてのトマス・ジエフアソンの一七七八年の手記

「ああ、諸君よ、これに匹敵するものが、世にまたとありましようか」

エドモンド・パーク、議院にてのナンタケット捕鯨に關する発言

「スペイン、——そはヨーロッパの岸辺に打ち上げられたる巨鯨」

エドモンド・パーク、出所不明

「国王の通常歳入の十番目の項目は、鯨、鯨」

魚等の高貴魚類捕獲の權利にある、と、海賊類に対する海面防禦のことも見つもった上で、称せられておる。それらは、岸に打ち上げられようと沖で捕えられようと、王の財産となるのである」

ブラクストン

「乗組みらは、やがて死の競技にと赴き、ロドモンドは、その頭上に鉤矛をしかとかざし、戦の刻々にそなえぬ」

フォルコナ『難破』

「かがやかに屋根、円蓋、尖塔はきらめき狼煙はおのずから立ちのぼりてしばし、蒼天の穹窿にかかり焰と燃えてただよいぬ

かくて、火をば水にたとえれば

上界に海洋は蒼々と卷き

やみがたき歓喜のほとばしりに

天の鯨は高らかに汐吹き上げたり」

クウバ『女王ロンドンに幸す』

「心臓に一撃を加えたとき、おどろくべき勢いで、十ないし十五ガロンの血潮がふき出した」

ジョン・ハンタ『鯨(小型の)解剖記』

「鯨の大動脈は、その口径において、ロンドン橋の水道管よりも大きく、その管をとどろき走る水勢も、鯨の心臓から噴く血潮に比し

て、強力さ速力ともに劣る」

ペイリ『神学』

「鯨は、後足をもたぬ哺乳獣である」

キウイニ男爵

「南緯四十度にて、抹香鯨の群をみとめたが、五月一日までは一匹も獲れなかった、というのは、海面がその群にぎしりと蔽われていたからである」

コルネット『抹香鯨捕獲業拡張のための航行記』

「わが立てる下の、混沌のただよいに跳ね、潜り、たわむれ、追ひ、闘えるはあらゆる色、形、相の魚族なりき。

それは言語に絶し、船乗りも、この恐ろしき巨鯨

鯨

この小波に群がる千万の小魚を、知らずといわん。

はてしなき群となり、浮かべる島のごと

荒涼として怪もなき渺茫を

四面より貪婪の怨敵に襲われつつも

神秘の本能にみちびかれて趨る。

鯨ら鯨ら、また怪魚ら、おのがじし、

剣、鋸、螺旋の角、鉤の牙もて前顎を鋭えり」

モントゴメリ『大洪水前の世』

「ああ、讀えよ、ああ唄えよ

鯨の族の、王者なるものを。

広漠の大西洋にも

かかる動き鯨はなく、
北極の海の涯にも
かかる豊満の魚は躍らず」

チャールズ・ラム『鯨の凱歌』

「一六九〇年のことだった。一群の人々が高い岡に立って、汐を吹きつつ相たわむれる鯨たちを眺めていた。そのとき一人が、その海面を指さしつづ叫んだ、——われわれの子のその孫たちがパンを得るために進むのは、あの緑の野なのだ、と」

オウビド・メイシ『ナンタケット史』

「私はスーザンと私のために小舎を建て、門口はゴシック拱門の形につくり、そこに鯨の顎骨を立てた」

ホオソン『トワイヌ・トゥルド・テイルズ』

「彼女は、四十年前も前に太平洋で鯨に殺された初恋の人のために、記念碑を注文しにきた」

同上

「いや、背美鯨だ」とトムは答えた。『汐吹きを見たんだ。またと見られんほどきれいな虹を二本吹きやがった。奴あ、脂でずっしりとつまってるんだ』

クーペ『水先案内』

「新聞が取り寄せられた。われわれは、鯨が舞台の見世物になったというのを、ペルリ

ン・ガゼット紙で見た」

エッケルマン『ゲーテとの対話』

「『おや！ チェイス君、こりや、いったいどうしたんだ？』私は答えた。『鯨に突っかられたんでさあ』」

『ナンタケットの捕鯨船エクス号が、太平洋において大抹香鯨に攻撃され、ついに破壊せられたるを語る雑誌記』同船一等運転士、ナンタケットのオウエン・チェイスによる。ニュー・ヨーク、一八二二年版

「夜のくだち、支橋索に船乗りは倚り、風はそぞろに鳴りひびき、月光は蒼さめ、照りては霧りぬ。

鯨は浪にたわむれて躍り

その跡に、燐の光ひらめきぬ」

エリザベス・オウクス・スミス

「この一頭の鯨を捕えるために、舟々から投じられた索縄の量についていえば、それは一万四百四十ヤード、つまりほぼ六英マイルにも及んだ……

時として、鯨はその巨大な尾を空中に打ち揮い、それは鞭のごとくにうなり、三、四マイルのかたにまでひびいた」

スオアスピ

「新たな攻撃から受ける苦痛にもだえ狂い、怒れる抹香鯨は動揺しつづけた。その怪偉な頭部をもたげ、大きく開く顎をもって、あたりのものみなに噛みついた。頭部で舟々に向

って突撃した。舟々はそのあおりにきわめて迅くきりぎり舞いをし、時として粉碎された。

……まったく驚くべきことであるが、かくも興味津々たる、また商業上から見てかくも重要な（抹香のごとき）獣が、かくも完全に等閑視され、一般大衆はおろか、有能な研究者たちまでもが、——後者は、その鯨の習性について、近年数多くのもっとも便宜の機会にしばしば恵まれているにもかかわらず、ほとんど好奇心を湧かさなかつた、ということである」

トマス・ビール『抹香鯨誌』一八三九年

「カシヤロット（抹香）は、真鯨（緑島鯨または背美鯨）よりも強力に、その前段と後端とに恐るべき武器をととのえているのみでなく、それらを攻撃的に揮うことを好む性情を頻繁にもち、しかもそれを、巧妙、勇敢、狡猾に使用し、かくて人をして、既知のあらゆる鯨群中の敵手としてもっとも危険のものと喚ぜしめるのである」

フレデリック・デベル・ベネット

『世界一周捕鯨記』一八四〇年

「十月十三日。『汐吹きだ』の音が橋頭にひびく。

『どの方向か』船長がきく。

『風下、船首四十五度線より三ポイント外であります』

『まっすぐに、舵を向けて追え』

「まっすぐに」

「アホイ！ 櫓頭番！ いま、鯨が見えるか」

「はい。抹香の群だ。や、汐を吹いた、や、跳ねた」

「叫ぶんだぞ、刻々、報告するんだぞ！」

「はい。や、また吹いた。また、——また

「まあた、吹いた、——ふーいた」

「距離は？」

「二マイル半」

「何だと、畜生め！ そう近いのか。全員呼集！」

J・ロス・ブラウン『捕鯨航海の素描』一八四六年

「これより物語ろうとする惨劇をその甲板に起こしたのは、捕鯨船グロウプと称し、ナンタケット島に船籍を有していた」

生存者レイおよびハシによる
「グロウプ叛乱記」一八二八年

「かつて彼が傷つけたことのある鯨に追いつめられたその時、彼は槍を手にしながら、しばらく攻撃の手をゆるめたのであるが、一方、怒り狂う怪魔は、ついに短艇に向って突っかかってき、彼と他の乗組みとは、この強襲を避けがたしと見るや、水にとびこむことによって、ようやく生命を全うしたのである」

タイアマンおよびベネットの『伝道日記』

「ウェブスタ氏曰く。——按ずるにナンタケ

ットは、わが邦の利益にとって大變に非凡で特異な地位を占める。人口は八、九千のものであり、彼らはここを本拠として海によって生き、その果敢堅忍の事業によって、歳々、多くのものを国富に寄与しているのである」

一八二八年、ナンタケットに防波堤を築くの請願に当って、ダニエル・ウェブスタ氏が米國上院においてなしたる演説速記より

「鯨はまっしぐらに彼のうえにのしかかり、おそらくその一瞬に彼は打ち殺されたのである」

ヘンリー・T・チーヴァー師『鯨とそれを捕うるもの、または、捕鯨者の冒険と鯨の生態、——ブリーブル提督の船に当りての拾録より』

「ちよつとでも騒ぎやがったら、地獄に落してくれぞ、——とサミュエルは返答した」

捕鯨船グロウプ号についての他の物語。第ウィリアム・コムストックによる『叛乱者サミュエル・コムストック』

「北洋へ、できうべくんばインドへの道を開かんとしての、オランダ人および英人の諸航海は、その主目的についていえば失敗であったが、はからずも、鯨群の集合地を世に明らかにした」

マッカロック『商業辞書』

「物事は相見互見だ。球は弾ねもどり、また弾ね出す。というのは、はからずも鯨群集合

地を発見したところの捕鯨船らは、同時に、かの神秘なる北西航路についての間接の手掛りをつかんだかの感がある」

未発表の『某文獻』より

「洋上に捕鯨船にあい、それに近よって見るものは、驚異の感にうたれずにはおるまい。縮帆して進み、櫓頭ごとに見張りが立ち、四周の茫漠たる海面に眼をこらすそのありさまは、通常の航洋船とはまったくうって変った情景を呈している」

『海流と捕鯨』——米國、某書より

「ロンドン等の近郊を散策した人々は、大きな彫りのある骨が、玄関口の門としてまたは林泉の門として、地上に直立しているのを見たことを思い出すであろう。そしておそらくは、それは鯨の肋骨であると告げられた経験をもつであろう」

某捕鯨者の『北極洋航海物語』

「鯨群を追跡した後に本船に帰ってみてはじめて、白人たちは、船はすでに、乗組員中の蛮人どもの血なまぐさき手中にあることを知った」

捕鯨船ホバマク号の奪掠および奪還に関する新聞記事より

「一般に知られていることだが、捕鯨船（アメリカの）に乗り組んで出たもので、出帆時

の本船にのって帰国するものはまれなのである」

『捕鯨船航海記』

「たちまち山岳のごときものが水中からもたげ、垂直に空中へと飛び上った。鯨であった」

ミリアム・コフィン、または鯨捕り男

「そりや、鯨は銚を打ちこむことができるであります。だが考えてもみなさい、強いびんびんした若駒を、尻尾の根っこを結わえたくらいで操れますかね」

『肋骨と橋冠』『捕鯨の章』

「ある時、私は、二頭の怪獣（鯨）が、それはおそらく牡牝だったろうが、前後にならんでゆるやかに、櫛の樹々が枝をさし交わす岸（テラ・デル・フェゴの）から投石の距離を遊弋しているのを見た」

ダーウィン『博物学徒の航海』

『後退！』一等運転士が叫んだのも無理はなかった。頭をめぐらして見た時、巨大な抹香が顎をぱっと開け、短艇の鼻先に迫りつつ、一撃で噛み込んだこうとしていたのだ。『後退！ 生命がけで！』『鯨殺しのウォートン』

「命知らずの銚手が、鯨をがんとやっつけるわっと、みんなで、気合いをかけろ」

『ナンタケットの唄』

「鯨よ、鯨よ、お前の国ははてもなく、嵐の吼える大海だ。力こそ正義のところでの力の巨人はて知らぬ海原の王者よ」

『鯨の歌』



一章 影見ゆ

私の名はイシユメールとしておこう。何年かまえ——はつきりといつのことかは聞かないでほしいが——私の財布はほとんど空になり、陸上には何一つ興味を惹くものもなくなつたので、しばらく船で乗りまわして世界の海原を知ろうとおもつた。憂鬱を払い、血行を整えるには、私はこの方法をとるのだ。口辺に重苦しいものを感ずる時、心の中にしめつばい十一月の霖雨が降る時、また、思はず棺桶屋の前に立ちどまり、道にあらず葬列の後を追いかけるような時、ことに、憂鬱の気が私をおさえてしまつて、よほど強く道徳的自制をしないと、わざわざ街に飛び出して人の帽子を計画的に叩き落してやりたくなるような時、——その時には、いよいよできるだけ早く海にゆかねばならぬと考える。これが私にとっては短銃と弾丸との代用物だ。カトは哲学的美辞をつらねてその身を剣の上に投げた。私は静かに海にゆく。これは少しもふしぎなことではない。この心持がわかるならば、どんな男でもその程度に応じて、いつの日にか私と同じ感情を大洋に抱きはしないだろうか。

さて、ここにマンハットウ(マンハッタン、ニューヨーク)の市が島の上に立っている。インドの島々が珊瑚礁に囲まれているように、波止場に囲まれ、通商の波がそれを取り巻いている。右に行つても左に行つても、道は水辺につづく。下町のはずれに砲臺があり、その気高い防波堤は、浪に洗われ、ほんの一両時間ほど前までは陸の眼のとどかぬところにいた微風に冷えていた。そこに立つて海を眺める人々の群を見よ。

安息日の午後の夢にまどろむこの町を歩き廻つてみたまえ。コリアズ岬からコエンテイルズの船付き場まで、またそこからホワイ・ホールズの傍を北に歩いてみたまえ。何を見るか——この町はずれのいたるところに、黙々たる哨兵のように、何千また何千という人間が海の夢想に耽つて身動きもせず立っている。枕に倚るもの、波止場の端にうづくまるもの、支那からきた船の舷牆の上に眺めているもの、さらによく海を見るために帆檣に昇っているもの。しかし彼らはみな陸上の人だ。常の日は檐と壁とに囲まれて、帳場に縛られ、椅子に釘づけにされ、机にかじりついてゐるのだ。それでは、これはいったいどうしたというのだ。緑の野が失われたのか、彼らはここで何をしているというのだ。

しかし、見よ！ もっと多くの群がくる、一直線に水に向つて、飛び込もうとでもするようになつてくる。ふしぎなこと！ 陸の最後の突端のほかには、彼らを満足させるものはない。あそこ倉庫の風下のかげにたずむことでは物足りない。——断じて。溺れぬかぎり、できるだけ水に近づきたいのだ。かくて彼らはそこに列をつくる。——何マイルとなく、何リ

ーグとなく。みな陸の人間だ。小径から、露路から、街道から、大通から、北から、東から、南から、西からきたのだ。しかも、ここでみな一つになる。これらの船の羅針盤の磁力が、彼らをここにおびき寄せたともいふのだから。

もう一度いおう。たとえば君が、湖の多い山地にしていると。君の好む小径を進むとしてみよ。十中八九、それは谷間にみちびき、流れの淀のほとりに君を置くだろう。そこに魔法があるのだ。もつとも放心になりがちな人間をもつとも深い瞑想状態に置き、そして彼を立たせてその脚を動かさせてみよ。その地方に水があるかぎり、かならず水の辺に歩むだろう。もし君がアメリカの大沙漠で渴を感じた時、隊中に哲学の教授がいたならば、この実験をしてみるという。たしかにだれも知っていることだが、瞑想と水とは永遠に結ばれている。

また、ここに画家があると。セイコの溪谷のうちでも、もつとも夢幻的な、幽邃な、静謐な、魅惑的な、浪漫的な風景を描くとする。彼が眼目として求めるものは何か。樹々はまるで隠者と裸刑像とが中にひそむような裂け目をもつてかなたに立ち、ここに牧場が眠り、かしこに家畜の群が眠り、向うの小舎からはものうげに煙が立ちのぼる。遠く森林に向つておぼろげな径がうねり、山蔭の碧色にぬれた突角の皺に向つて這いのぼる。しかし、いかにこの画面に夢幻の気があふれ、松はその葉のように牧羊

者の頭上に嘆きの声をおとそうとも、ただこの牧羊者の眼が水の流れの魅力に奪われているのでないとするれば、すべては無駄である。また、六月の日に大草原を訪れてみたまえ。何十マイルとなく鬼百合に膝を没して歩むとき、——なにか一つの魅惑がかけてはいないか。——水——そこには一滴の水もないのだ。もしナイヤガラが砂の瀑布であつたならば、君は千マイルもの遠くから見物に出かけるか。あの貪しいテネッシの詩人が、たまたま二掴みほどの銀貨を手にしたとき、今までなくて困っていた外套を買ったものか、ロカウエイ海岸への徒歩旅行の資にしたものかと考えこんでしまったのはなぜか。頑健な肉体とその中に頑健な心とをもつほどの少年ならば、ほとんどみなが、一時はかならず海に乗り入ることを夢みるのはなぜか。君が最初の船旅をしていま船は陸の見えぬ沖まで出たのだとはじめてきかされたとき、一種の神秘的なときめきを感じるのとはなぜか。古代ペルシア人が海を聖なりとしたのはなぜか。ギリシア人が海を一つの神としジヨヴの同胞としたのはなぜか。これはみな無意味のことではない。いな、泉に映る悩ましく優しい影をつかむことができたためにそこに飛び込んで溺れたというナシサスの物語には、もつと深い意味がある。その同じ影をこそ、われわれはあらゆる河と海とに見るのだ。それは把握し得ぬ生命の幻だ。これがすべての鍵だ。

さて、眼のまわりがうす暗くなり、おのれの

肺臓をあまりにつよく意識しはじめるとき、私は海にゆく習慣をもっているといったが、それは乗客としてゆくののだと思われてはならない。乗客としてゆくには財布が要るわけだが、財布はその中に何か入っていないければぼろとかわりはない。それに、乗客は船に酔つたり、喧嘩したり、夜は眠れなかったり、——海の飲びを味わわない。だから私はけつして乗客にはならない。また、幾分はその値打はあるつもりだが、提督、船長、司厨などとしてもゆかない。かかる位置の光榮と尊貴とはそれを好むものに任せておく。私は、あらゆる高尚尊大な骨折り、苦勞、焦心などは一切嫌うのだ。商船、鯨、横帆船、縦帆船などというものに氣を使うことはしなくても、自分ひとりのことをかまっているだけでいっぱいなのだ。それから司厨だが、——司厨は船では士官なみのもので、そこにある種の名譽がないとはいわぬが、——しかしどうしたものか、私はまだ鳥を焼くことを想像して見たこともない。もつとも、焼いて、みごとにバターをつけて、正しく塩と胡椒をつけたとなると、私以上に鳥の焼物について、うやうやしくとまではゆかぬまでも、尊重の意をこめて語る人間はないのだが。今日、鴨、河馬などの木乃伊を、ピラミッドの巨大な籠の中に発見するが、それは古代エジプト人の、焼鴨や焼河馬に対する迷信的愛着のほどを示すのである。

かくして、海にゆくとき、私は一介の水夫になる、帆柱の直前に、前甲板の垂直下に、ある

いは最上檣高くとまっているのだ。もちろん、何かと命令を受けるものだから、五月の野原の鯨のように、檣から檣へ飛びまわらねばならぬ。これは初めのうちはたしかに苦しい業だ。ことに、陸上の旧家名門の出の人、ヴァン・レンセレア家、ランドルフ家、ハーディカニニュート家等の人ででもあるならば、自尊心をいたく傷つけられることである。とりわけもしこの船乗り稼業に首を突っこむ直前まで、田舎あたりの学校教師で威張っていて、どんな大男の生徒でもびくびくと前に立たせてでもいたのなら、教師から水夫への転変はじつに痛ましいもので、セネカがストア派流かの徳を強くわかし有たないでは、これを鼻であしらって我慢するなどはできぬわざだ、と私は警告しよう。しかしこのことも時がたてば心から消える。

田舎漢の老ぼれ船長が、私に箒を持って甲板を洗わせたとそれが何だ。新約聖書の教えにたらしめるとき、この屈辱が何ほどのものであろうか。そのとき私が老ぼれ船長に恭順の意を表したとしても、大天使ガブリエルは少しでも私のことをさげすむと君はおもうか。奴隷なものか世にあるか、と私はききたいのだ。だから、たとえ老船長がいかに私をこき使い、いかに小突きまわそうとも、それでいいのだ。ほかの人々もみな、——肉体的あるいは精神的の意味において奴隷なのだ、と私は満足する。かくして、全世界は小突きっこしており、各人は互に他のものと肩をすりあわせながら満足し